
ガンゲイル・オンライン ～鉛の亡霊～

ニジマス@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンゲイル・オンライン　　（鉛の亡霊）

【Nコード】

N34360

【作者名】

ニジマス@

【あらすじ】

アミウスフィアを買って《VRMMO》であるガンゲイル・オンラインをプレイしたんだが……バグなのかバグじゃないのか、謎のキャラクターがコンバートされていた！ しかも武器や金は最初から持ってるし、身に覚えのない戦闘技術まで身に付いてるし……これから俺はどうなるんだ！？

開幕　くプロローグく（前書き）

初投稿、なんです、初作品ではありません。

予約記事を使ってまして、10月28日にもうひとつの小説が記載されるはず。

頑張っ更新していいとは思いますが、更新が遅くなったりするかもしれません。

それから、処女作じゃないとはいえ、駄文レベルですのでご了承ください。

感想やアドバイスなどは歓迎です！　気軽にどうぞ。

開幕　　プロローグ

＋ガンゲイルオンライン——略称GGO。

銃と鋼鉄が支配する世界で、プレイヤー達は最強のガンナーを目指す。プレイヤーキルPKが可能なため、敵モンスターだけでなくプレイヤー同士でも争い勝利を狙うというゲームシステムである。

《GGO》に登場する武器は、実弾銃、光学銃の二つに大別される。この二つの特徴は、光学銃がすべて架空の名称を使っているのに対し、実弾銃は実在する銃の名称をそのまま使っている。故に、《GGO》のプレイヤーの大多数はガンマニアが多い。

――出版・印刷　W・M　週刊VRMMO　一部切り抜き

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

オーケー。

冷静になれ。まずは状況を確認しよう。

そもそもの始まりは何だ？

簡単だ。ひとり暮らしの俺が貯めた金で念願のアミューズファイアを買い、初めてのゲーム、つまりこのガンゲイルオンライン《GGO》をプレイしたことだ。

じゃあどの時点で問題が発生したのかを考えてみよう。

まずセットアップステージ……は特に問題はなかったな、うん。
次。

アカウント及びキャラクター作成……は結構な時間をかけたな……。
外見に拘るつもりはなかったんだが、細かい部分まで設定が決められて、気が付くと熱中してた。

これが《VRMMO》なのか……と感動していたのも覚えている。

だが、誰だってキャラ作成には時間をかけるだろう。
だからここでは問題はなかった。

あるとすれば、すべてを設定し終えた後だろう。

《GGO》の説明書によれば、最初のスタートはこの世界の中央都市《SBCグロッケン》。

数多の高層ビルが天まで聳え、ネオンカラーのライトが金属板をつないだような床の上を反射する。その精工な風景に、歓喜して叫び声をあげた。

———ところまでは良い。たぶん問題の原因は、そこからだろう。

バグった。

それ以外の言葉で表現できないほど、それはもう見事にバグった。

頭にノイズのようなものが流れ込んだ後、俺は意識を失った。
まさかゲーム内で気絶があるとは思わなかったが、とにかく意識を失った。

で、起きてみたらそこは暗い洞窟の中。

ここがまだゲーム内で、おそらくどこかのフィールドだということ
は分かるが……

———で結局、あのバグの原因は何だろう？

「俺が分かる訳あるかーっ！」

うん。見事に響いたな俺の声。

なんかむなしいよ……。

「いやいやいや、落ち着くんだ落ち着け。とりあえず一旦ログアウトして、それから苦情を言いに行こう」

確か右手を振るとメニューが出るはずだ。

そしてその右下にログアウトのアイコンが……。

「————…ない？」

右下以外の、三隅を見る。

「ない……」

一度メニューを閉じてから、再び開き、確認。

ログアウト、と書かれた文字はどこにもなかった。

「ウソだろーっ!？」

二度目の叫び声が、洞窟内に響き渡った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

キャラクター名である《ブレンディット》の表示を視界の隅に見ながら、俺はとりあえず近くの石を蹴ってみた。
石は軽い音と共に、暗い洞窟の闇に消えた。

ログアウト不可という言葉に、どっかの浮遊城事件を思い出して俺は盛大な溜息を吐く。

まさか、このキャラクターが死んだ瞬間、現実からも永久退場、なんてことにはならないよな……？

激しく不安だが、ちょっとは落ち着いてきた。

「……しっかし……俺は、コンバートなんてしてねえぞ？」

メニューを開いてログアウト出来ないと知ったが、他にも分かった事がある。

それが、このキャラクターがコンバート扱いになっていることだ。

「ステータス値が高いし……AGI—STR型とも言えるのか？」

それともう一つ。

コンバートで持ち出せないはずの（まあコンバートした覚えもないんだが）この世界特有のアイテムであろう物が最初から存在していた。

武装については、要求A G Iのやたら高い実弾銃《カローンP21》が二丁。
それから《フォトンソード》という剣。説明にあったが、S Fでありがちな光剣らしい。

服装に関しては、特殊な模様が入ったジャケットに、二つの銃を入れるためのホルスターが二個。それから動きやすさに特化されたズボンに光剣を入れるホルスターが一個付いている。
重さはあまり感じなかったが、ステータスを見る限り、どれもかなりレアなアイテムだと分かった。

「てか……チートじゃん」

勿論、俺自身戦闘経験なんぞ有るわけもないし、銃の名称は全然詳しくない。

それらを見たら……いや、それでも初心者から見れば十分チートだろう。

「チート……だとしても、技術がないと意味ないしな……」

ぽつりと呟いて気がついた。

——そんなことしてる暇じゃねえ！

「ログアウト不能の事態をどうにかしねえと。それに、ここが高レベルダンジョンじゃないとは限らないし……ていうか、本当に《S A O事件》みたいな状態にならねえよな……？」

とりあえず立ち上がり、あたりを見渡す。

洞窟内にほとんど光がなかったが、後方に目をやった時に僅かな光が見えた。

チカチカと点滅してるみてえだが……。

とりあえず、俺はそこに向かって進み始めた。

開幕　　プロローグ　　（後書き）

ちなみに作者は、銃に詳しくありません。
でも狙撃というのには憧れますw

登場させてほしいキャラクターや銃などがありましたら、感想の所にでも書いていただければ出すつもりです。
ただし作者は無知なので、できるだけ詳しく書いてくれると助かります。

次回の更新はいつになるかは分かりませんが、頑張っていきます。
ですので、応援、よろしくお願いします！

出会い（前書き）

第二話目です！

今回は少し独自の解釈の仕方や、原作知っている方は、そんなのねえぞ？

と思うかもしれませんが、そこはやわらかくご指摘くださるかスルーしていただければとw

感想などは是非。

駄文ですが、お楽しみください！

出会い

十カローンP21

特殊作戦用の拳銃で、どんな場面にも対応できるよう作られた拳銃。弾は9ミリパラベラム弾を使用。21発の弾丸を放つこの拳銃は、凄まじい速射を実現する。装備要求AGIが高いという、少し変わった武器である。

十フォトンソード

ビームサーベル、ライトセーバー、光剣など、好き勝手な呼ばれ方をされている接近戦専用の武器。攻撃力は、一度でも食らえば致命的といわれるほどだが、その攻撃範囲の狭さゆえに誰も使いたがらない。軽いのが唯一の長所、とは某狙撃手の言。銃と同じく、固有名がある。

・・・・・・・・・・・・・・・・

《GG》とは、ガンゲイル・オンライン《ゲームコイン現実還元システム》を初導入した全VRMMO中唯一のゲームだ。

ゆえに、このゲームにはプロが存在し、彼らのゲームに費やす時間は理解できないほどの量だ。

そして今、《SBCグロッケン》から少し離れた位置にある巨大な迷宮型洞窟で死闘を繰り広げるプレイヤーも、間違いなくプロのプレイヤー達だった。

「左から来てるぞっ！ 後方支援はどうした!？」

「うっせ。こっちだって忙しいんだよ！」

「十時の方向から接近！ サブ・マシンガン 短機関銃で迎え撃て！！」

岩陰から、迫ってくる敵を見たハイルもやはり、プロのプレイヤーであった。

洞窟の壁とほぼ同色の服を纏い防弾チョッキを着て、ブロンドの髪をポニーテールで纏めた彼女は、しかし、とても前線に立つような兵士の姿には見えなかった。

理由は簡単で、キャラクターが兵士と言うには可愛すぎたのだ、外見が。

《GGO》には珍しい女性プレイヤーで、大きく開いた瞳は薄い緑色に染まり、長い睫毛に桃色の唇。胸は……少々残念なようだが、十分可愛いと言える外見であった。

そんな彼女は自らの持っているアサルト・ライフル突撃銃、《FAMS》を握りしめ、機会をうかがっていた。
岩陰から飛び出し、敵を撃ち殺すその時を。

「おいハイルっ！ 何処だ！？ 手え貸せよ！」

（無理無理無理ですって！ 声出したらばれちゃうでしょ！？）

パーティのリーダーが必死に声を張り上げているが、答えられるはずがない。

現在進行形で敵の足音が、徐々に迫ってきているからだ。
それはもう、心臓バクバクである。

（ああ……緊張するなっ！ 気合い入れろ宮原五月！）
みやばらさつき

ハイル／五月は、現実世界での自分の名前を心の中で叫び、気合いを入れる。
サツキ

戦闘は別に初めてじゃない。

しかし、緊迫感に満ちた戦闘は、いつになっても慣れそうにない。

足音が、すぐそばまで来て――――、

「――――ッ！ ハアアッ！！」

「なあっ!？」

ハイルは岩陰から飛び出し、敵のアタッカーに向かって突撃銃の引き金を引く。
アサルト・ライフル

その途端、彼女の視界に薄いグリーンの《着弾予測円》バレットサークルが広がる。

《着弾予測円》バレットサークルは、その名の通り、弾を撃った場合の着弾する位置を示す円だ。銃弾は円の範囲内のどこかにランダムで着弾する。アミューフィアがプレイヤーの鼓動を感知し、落ち着いているほど円のサイズは小さくなる。つまり、心臓の鼓動がゆっくりしているほど、自分が落ち着いているほどより正確な射撃ができるというわけだ。

そして、今のハイルはかなり緊張しまくっていたので、円のサイズはかなり大きい。

———だが、

「ぐう……!!」

今の敵と自分との距離は1メートルに満たない。
フルオート

全自動連射で撃とうが単発で撃とうが、命中は確実。
セミオート

そして彼女の武器は突撃銃の《F A — M A S》。
アサルト・ライフル

装備要求STRの高さから、STRを優先に上げないと装備できない高威力の銃だ。

つまり、彼女のSTRは結構高い。

「やったっ!」

それを至近距離で食らって無事なはずもなく、眼前の敵が無数のポリゴン片になって砕け散った。

硬質なガラスを叩き割ったような音が耳に響いて多少不快だが、とりあえず離脱だ。

音のせいで敵が集まってくる。

「よくやってくれたな! ハイルっ!!」

「おーっすリーダー!」

パーティのリーダーにニカッと笑いかけると、ハイルは敵に威嚇射撃をしつつ、後退した。

今回の戦闘、実は待ち伏せを受けてかなり一方的なものだったのだ。
アンブッシュ

現に、六人いたパーティの内三人はすでにやられていた。もっとも、彼らが全員対人用の実弾銃を携行していたなら話は別だっただろう。

だが今回の狩りはモンスターを相手にするつもりだったのだ。四人は光学銃を持ち、それは対モンスター用の装備。対人メインのパーティとやり合えば、敗北は必須。

「————かに思われたが、我々は生きているぞーっ!!」

「……ハイル? 頭のどつか打った?」

えへへ、と笑うハイルは残った二人の男たちと共に、洞窟の出口に向かって走ろうとしたが、

「————がつ!」

走っていたパーティメンバーが、頭を仰け反らせて突き飛ばされたように吹っ飛んだ。

理由はおそらく、前方からの狙撃。

それが意味するのは、

「挟まれた……?」

「大ピンチじゃないか……?」

どちらも正解。

後ろは実弾銃フル装備の敵が七人。

前には狙撃手ひとりを含む人数不明の敵パーティ。

ハイル含むこのパーティが少し有名になった途端、これだ。

「さあて……どう料理してやろうかな？」

ひとりの敵アタッカーが近づいて来た。

ハイルは、その顔に見覚えがあった。というか、つい数週間前に会った顔だ。

「あーっ！ 十三さん！」

「違うっ！ サーティスだ！」

敵アタッカー、サーティスは数日前、ハイル所属のパーティとやり合った。

勿論そのときは不意打ちではなく、こちらも実弾銃を持っていたので返り討ちにできたが、それを逆恨みしてここまでのパーティを結成したのだろうか？

ちなみにハイルが呼んだサーティスの十三さんという呼び名だが、これはサーティスの名前が英語で13を意味するサーティンに似ていたので付けられた彼のあだ名だ。

本人は、この不本意極まりないあだ名を付けたハイルをかなり恨んだという。

「ようやく復讐の時が来たなあ！ これでお前も少しは————」

「おい十三。どうでもいいが、ランダム・ドロップしたアイテムは

お前抜きで分配させてもらうからな。約束は守れよ」

「————ぐっ。分かってる。それより俺は十三じゃ————」

「十三。お前、復讐のためにこんな面倒なことしたのか？ 面白い奴だなあ」

「だからっ！ 十三じゃねえ！！」

哀れ、敵味方関係なしに本名（キャラ名）を正確に言ってもらえないサーティスであった。

ともあれ、ピンチなのは間違いない。

ハイルは、呑気にも半ば諦めかけていた。

「それじゃあ、死んでもらおうか！」

「ちっ！」

サーティスが自らの銃の引き金に指をかけた。

ハイルも、そしておそらくハイルのパーティーリーダーも、タダでやられるよりは数人を道ずれにしてやる！ という覚悟でそれぞれの銃を意識した。

負けるのは間違いないが、タダでやられるのは、プライドが許さない。

そして————、

「おーいっ！」

「は？」 「へ？」 「ん？」

それぞれがそれぞれの反応を示すと同時に、声のした方を見る。
そこにいたのは浅黒く日に焼けた肌と、錆びたように赤いボサボサ
の髪が特徴的な男の姿で、

「戦闘中っぽいトコわりいけど。とりあえず、ここドコ？」

錆びた赤髪の男は、そう訪ねて来た。

出会い（後書き）

どうでしたでしょうか？

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

ご質問等ありましたら、お気軽にどうぞ W

閃光（前書き）

今回はオール戦闘です。

戦闘描写は結構不安なのですが、スピード感を感じていただければ幸いです。

それではまえがきもこの辺で、本文をお楽しみください！

閃光

↑F A — M A S

ファマスと呼ばれる^{アサルト・ライフル}突撃銃で、フランス軍が正式採用している。装備要求STR

が高めに設定されており、口径5.56ミリから打ち出される銃弾は、安定性、集弾性が高く、高威力で扱いやすい武器として中の上あたりのプレイヤーが好んで使う。

.....

洞窟の出口かと思った光の点滅は、どうやら違っていたようだ。

「これがGGOの戦闘………」

前方には銃を構えて戦うプレイヤー達の姿があり、そのプレイヤー達に応戦しているのが二名。

応戦している方は後退しながら戦っており、頭上に青く光るHPバーも、三割は削り取られていた。

ブレンディットは、八人对二人という極めて不利な状況を見ていたが、直後、ガラスが割れたような音が響いた。

「もう一人いたのか！」

先頭に立っていた男が、岩陰から飛び出してきたプレイヤーに撃ち殺されたのだ。

ブロンドのポニーテールを振り回し、すぐに身を翻した少女は全速

力で洞窟の出口（そっちに出口があるんだろう）に向かって走り始めた。

状況は七対三。

威嚇射撃をしながら逃げようとしていた少女たちだったが、

「————がっ!？」

逃げていた三人の内、ひとりが頭を仰け反らせ、直後、爆散。残った二人は苦い顔で足をとめた。

（あれは……狙撃されたみたいだな）

つまり、出口にも待ち構えているプレイヤーがいる……？

「こりゃあ、やべえかもな……」

ブレンディットは腰のホルスターにしまっている拳銃。《カローン P21》を意識した。

どちらにしろ、初心者俺が出しゃばるのはあまりに無謀だが……。

（あの娘^こ見てると………なんでだろうね。助けたくなくなってくる）

ていうか頭の片隅で、どこかで会ったような記憶があった。

《GGO》のプレイは初めてだから、そんなことはないはずなのだが。

と、思ってるうちに、二人を追い詰めた方のプレイヤー達の中からひとりの男が進み出て、銃を構えた。絶体絶命の状況。

それを見たブレンディットは――――

「おーいっ！」

「は？」 「へ？」 「ん？」

それぞれがそれぞれの反応を見せた。

ブレンディットは意識的に不敵な笑みを浮かべ、言った。

「戦闘中っぽいトコわりいけど。とりあえず、ここドコ？」

しばらくの沈黙。

全員が啞然、もしくは茫然という顔をしている。

「おい」

七人の中のひとりが立ち直り、こちらに声をかけて来た。

「お前、ふざけてんのか？ こんなところで会ったら、自分も殺されるかもしれないって気付かなかったのか？」

「それはねえよ。おれア絶対に殺されねえし」

見せつけるように、神経を逆撫さかなでするように笑う。

何故そんな事をしたのか分からないが、助けると決めて動いたのだ。

まずは、全員の注意をこちらに集める。

「ちっ、図に乗ってんじゃねえよクソ……」

予想通り、キレやすいらしいひとりが銃をこちらに向けて、

「おいおい、やめとけって————」

男の止めようとした声を遮ったのは、銃声。

ポリゴン片を散らし、仰け反り倒れたのは銃を向けていた男。

「ッ！」

それを見て、全員が凍りついた。

何故なら、誰一人として、ブレンディットが、銃を抜いて撃った瞬間、が見えなかったからだ。

いつの間にか、銃口を向けていたブレンディットだけが、不敵に笑う。

「な？ おれあ死なねえって言ったろ？」

直後、銃声。

これはブレンディットではない。仲間がやられ、すぐさま彼を敵と判断した男達の銃声だ。

フルオート
全自動射撃で放たれた銃弾がブレンディットに迫る。

———が、

「いない!?!」

すでにブレンディットの姿は消えていた。

——いや、違う。消えたのではなく、低い体勢で突っ込んできたのだ。

《カローンP21》を連射しながら。

「ぐわっ!？」 「うわあっ!？」

二人が頭部に二発ずつの銃弾を受けて倒れる。

複数を相手取る場合の基本戦術、ダブルタップあいてどという射撃法だ。

ひとりに対し、二発ずつの銃弾を当てて戦闘不能にする。それだけでは死なない場合もあるが、少なくとも行動を一時的に制限することができる。

そんなダブルタップで射撃しながら、ブレンディットは疑問を持っていた。

（なんで経験がないはずなのに、こんなに戦える？ それに体が：異常なまでに軽いッ!!）

今日が初めての《GGO》で、彼は身に染みついたような動きで敵に接近する。

「おい！ 銃弾くらい避ける!!」

避けるというのは、《弾道予測線バレットライン》を利用した銃弾の回避法のことだ。

このゲームでは射撃時に銃弾がどの位置を通るのか、という線が視

界に浮かび上がる。

その線の直線上からずれば、銃弾を回避することができるのだが、

「こいつの銃！　なんで弾道予測線が出ねえんだよ！？」

男達の視界には《弾道予測線》バレットラインが一本たりとも浮かび上がらなかった。

ゲームの仕様だ。しやう浮かび上がらないということは、有り得ない。

あるひとつの方法を除いては。

「実力での……射撃？」

男達全員の考えを代弁したのはハイルの一言。

実力での射撃。それは反則と言っても良い技能だった。

——ただし、成功できれば、の話。

実力で当てる、が意味するは、つまり《弾道予測線》バレットラインが表示される前に引き金を引くという射撃法のこと。そして、《弾道予測線》バレットラインは《着弾予測円》バレットサークルとほぼ同時に表示される。

さらに簡単に言うと、実力での射撃は《着弾予測円》バレットサークルに頼らない射撃を指す。

たいていの場合は《着弾予測円》バレットサークルを利用した射撃の方が、命中率はるかに高い。

だから、実力での射撃は現実リアルでもそれなりの射撃技能がないと不可能な技。

「う、嘘だろ………」

それでも応戦する男たち。

しかし、ブレンディットのA G Iがかなり高いのか身を僅わずかずつ動かし、つぎつぎ銃弾を回避する。

そして男達の絶望は続く。

「ハイルっ！ 反撃だ！！」

「ちょ、待てお前ら————」

ハイルのパーティリーダーが一気に攻勢に出る。

そしてリーダーの放った銃弾はサーティスの額を掠めた。

それを合図に、ハイルも突撃銃アサルトライフルの弾丸を全自動射撃でばら撒まいた。

「お、覚えてろよおーッ！！」

至近距離の連射に抵抗する間もなく、サーティス爆死。

ハイルとパーティリーダーは狙撃に備えて岩陰に隠れる。

で、そんなどうでもいい出来事とは別に、集団の真ん中に入り込んだブレンディットは、懐から一本の金属の筒を取り出した————

「フォトンソードだどっ！？」

「大正解♪」

金属の筒から、赤色の閃光が弾はじける。

その場で体を一回転させたブレンディットの光刃に、二人の男が胴体を切られて爆散。ひとりが自らの短機関銃^{サブ・マシンガン}を切断された。

抵抗するには、ブレンディットの動きはあまりにも速過ぎた。

「じよ常識外れだろ……ははは……」

残った男が茫然と呟く。

ブレンディットは左手の《カローンP21》の引き金に指をかけて、

「……いや、俺もびっくりしたよ」

自分自身、覚えのない動きに持った疑問を、銃弾と共に投げかけた。

閃光（後書き）

今回は色々な技能、設定が登場しましたが原作がまだ完結してないので、これから似たような設定が出てくるかも……。そんな場合は後で全部修正しますからご心配なくw

射撃法（たとえばダブルタップ）などは随時詳しく記載していくつもりですので、それで分かなければ感想欄でお聞きください。

あ、普通の感想も勿論、大歓迎ですので！

フレンジィット(前書き)

ブレンディット

十ダブルタップ

拳銃射撃を用いた戦闘で複数の敵を相手取る場合に使われる戦法。
一人につき二発ずつの弾丸を撃ち込み、行動不能もしくは即死を引き起こす基礎テクニック。銃弾を温存し、一人に集中しないようにするために使われる射撃法。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ハイルの目の前で展開された戦いは、まさにいままで経験した中では別次元に高度な戦いだった。

彼女自身、実力による射撃、つまり《弾道予測線》バレットラインが表示されない射撃を見たことも聞いたことも無い。その上、あの赤髪の男――ブレンディットの射撃はただの一発も外れていない。命中率百パーセント。実力の射撃にしたって、レベルが高すぎる。

そしてもうひとつ。

彼はフォトンソードを使っていた。それもかなり手慣れた様子で。今日にいたるまで、フォトンソードを戦闘で使用しているプレイヤーは見たことがなかったというのに。

一方、そんな敵パーティを一瞬で壊滅（まだ出口に狙撃手と数名隠れているかもしれないが）させたブレンディットは自分自身の手を見て、驚いたように目を見開いていた。

「俺……あんな経験なんて……」

ぶつぶつと呟いていたようだったが、こちらにまでは聞こえてこない。

ハイルはもう一度、ブレンディットを見た。

すでに赤い光刃フォトンソードと拳銃はホルスターしまに仕舞われている。
が、油断はできない。

彼が敵パーティの不意を打つ時に見せた、あの雷光のような抜き打ち。注意していても避けるのが難しい射撃に、気を抜いたらどうなるかなど考えるまでもない。

（あ、危なすぎる……というか危険じゃない要素がない……）

表面は平静を装っているハイルだが、内心は小動物のようにビビりまくっていた。

「おいアンタ」

そんな中、ハイルのパーティリーダーが彼に声をかけた。

その手には、ブレンディットをやはり警戒しているのだろう、サブ・マシンガン短銃サブ・マシンガンを持っていた。

声をかけられたブレンディットは、こちらを見た。

「はい？」

見た目とは裏腹に、間の抜けた声。

とても先程の戦闘を行った人物とは思えない声。

キョトンとしたようなブレンディットに、リーダーはやり難そうに

聞いた。

「えーっと……まあその、なんだ。俺達は助けてもらった、で良いのか？」

「助けてもらった……？ ……ああ、まあそうですね」

「敵ではない？」

「敵ではないですかね。今のところは」

つまり、攻撃して来るなら相手になろう、という事だろう。

——さっきの戦いを見て、戦おうとする人っているの？

ハイルは素直にそう思ったが、とりあえずは自らの《F A — M A S
》を背中にまわす。

リーダーも腰のホルスターに短機関銃^{サブ・マシンガン}を仕舞った。

とりあえず、思ったより好戦的ではないようだ。

「てか、こっちからも聞きたい事あるんですけど……」

ブレンディットは言ったが、リーダーは首を振った。

「まずは、自己紹介をさせてくれ。話は、それからだろう？」

「あー……そうでした。すいません。俺はブレンディットって言います」

「わ、私はハイルです！」

「俺はさっきのパーティーリーダーの源氏だ。^{ゲンジ}礼はまだだったな。さつきは助かった。ありがとう」

頭を下げたリーダー、源氏に習いハイルも頭を下げる。

《GO》はゲームの特性上、というか現実の金を目当てにする者が大半なので、冷たかったり捻くれたりしたプレイヤーが多い。その中で、源氏の義理堅い性格は大きな美点だろう。

「いや、大丈夫ですよ源氏さん。それより……」

ボサボサの髪を掻きながら、ブレンディットは言った。

そういえば、聞きたいことがあるって言ってたけど、なんだろう？ 射撃技術はともかく、フォトンソードをそれなりに使いこなしたとあればまずベテランプレイヤーだ。少なくともハイルの知るベテランの中では、間違いなく一位か二位入る。

そんなベテランが、自分達になにを聞こうというのだろうか？

「聞きたいこと、ですよね？ なにが知りたいんですか？」

ハイルが先に言った。

ブレンディットはやや安心したように、

「良かった。不安だったんですよ。とりあえず——」

そして、ハイルと源氏は再び驚くこととなる。

「—————ここ、何処ですか？」

「へ？」 「は？」

源氏と綺麗に被ったハイルの疑問系の一文字は、水滴が落ちるように洞窟に響いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

人工的なネオンライトの光が店内をブルーに染めている。

金属板を繋ぎ合わせた床の上に、丸いテーブルがいくつも並び、カクテルのような琥珀色の飲み物が店内の二色目だ。奥まったカウンターにはNPCのバーテンダーがショットグラスをシェイクしていた。

ここは《SBCグロッケン》に多々あるバーのひとつ。

名前を《ディープ・ブルー》。名の通り、店内のインテリアは全て濃い青色で統一されている。

「てことは、なんだ？ お前はログアウトできないのか？」

ゆったりとしたBGMが流れる中で、一人の男が困惑気味にそう言った。

そこそこの名の通ったプレイヤーで、キャラ名は源氏という。

「そうです。信じられないとは、思いますが」

反対側で源氏に答えたのは、錆びたようにボサボサな赤髪の男、ブレンティッド。

「ふむふむ。つまり……謎のキャラデータがコンバートされていて、謎のアイテムがインベントリに入っていて、謎の技術が身に付いていた……謎ばかりですよ」

分かっているかは別として、納得したように頷いたのはブロンドポニーテールの女性、ハイル。

三人はカウンターに肘を付けて、思い思いの表情でグラス傾け、液体を口に含んだ。

その飲み物は、とても作り物とは思えない滑らかなのど越しだった。

三人の中でとりわけ暗い顔をしていたブレンディットは、それがあまりに本物に近く感じて驚く。この再現力は偽者——つまり電気信号を脳が受け取っているだけ、という常識を疑い^{あたりまえ}そうになるほどだ。

「…………GMコールは試したのか？」

源氏が言ったGMコールとは、問題が発生した時に《GM》^{ゲームマスター}に連絡し修復を要請する機能のこと。大抵のゲームにはこの機能が備わっており、GGOも例外ではない。

「したんですけど、繋がりませんでした」

「繋がらなかった？　おいおい、それはおかしいだろ。GMコールできないなんて聞いたことがねえ」

言いながら、源氏がメニューを開いて《GMコール》をしようとする、

「……《現在回線が込み合っております。後ほどお掛け直してください》って……」

「リーダー。今日、なんかあったんですか？」

「いや、イベントの類は無かったと思うが……考えられるとしたらアメリカだろう？　GOの本体はそこにあるみてえだからよ」

「確かに。^{あっち}アメリカでアップデートとかあれば、確かに繋がり難くはなるはずですし」

「そ、そんな……今日一日ログインしっぱなしって……」

さらにどんよりしたブレンディットは、^{やけさけ}自棄酒を煽るようにカクテルをのどに流し込んだ。ピリピリとした刺激がのどを冷やし、果実の香りを鼻に感じる。

GOではいくら飲んでも酔う事はない。
その仕様に、ブレンディットは感謝した。

「……心置きなく飲むのはいいが、落ちた後はらあ下すぞ？」

「大丈夫です源氏さん……しばらくはどうせ落ちれないんですから」

ブレンディットはバーテンダーに追加のカクテルを注文した。
コンバートされたデータの金をこんな風に使う事ならうとは、予想していなかった。

「源氏さんにハイルさん。今日はありがとうございました。俺はしばらく時間潰していきます」

いつ落ちれるか分からないのに、付き合わせることも無いだろう。相談に乗ってもらっただけで感謝だ。

源氏は軽く笑うと、ネームカードをブレンディットに差し出した。

「そんじゃ、俺らはもう行かせてもらおうわ。なんか困った事があったら、ここに連絡してくれ」

「私のもどうぞー」

「あ、ありがとうございます」

ブレンディットは二人のネームカードを受け取ると、たどたどしい操作で自分のネームカードを二枚だし、二人に渡した。

「そんじゃ、まあGMが応答するまでの間だ。頑張れよ」

「じゃあ、またね♪」

ハイルと源氏は席を立ち、店を後にした。

ブロンドの髪がわずかに光って、二人の姿は見えなくなった。

「ハイルさんと源氏さん、か……………」

後姿をしばし眺め、ブレンディットは追加のカクテルを一口含んだ。

フレンジィット（後書き）

前回の続きでした。

次回は現実でのお話です。

……ん？ 主人公、ログアウト不可じゃなかったっけ？

そこんところは次回明かされます！

次回も是非、ご覧ください！！

斎藤 健也（前書き）

今回は少し短いです。

まあたまにはこれぐらいの量でも良いかなと思っていたり。

………たまに、になるか不安ですが。

駄文ですがお楽しみくださいw

斎藤 健也

・・・・・・・・・・・・・・・・

【アメリカ・某所】

AM0000

「…………ツ!!」

耳を劈く爆音に、彼は体を竦ませる。
途切れることなく続く轟音に、彼はすぐさま場所を移動しなければならなかった。

《ブローニングM1917重機関銃》。
それが轟音の正体。

ひとりでは携行する事すら困難な重機関銃だが、ここは現実の世界ではない。7・62ミリの口径から吐き出される凶暴な弾丸は、一片の慈悲すら認めないほどの勢いで彼の背にしたコンクリの壁を破壊していく。

壁がいくら分厚かろうと、間に鉄骨があろうと、その弾丸の前では紙のように引き裂かれる。

「ウオオオーーーーッ!!」

雄叫びを上げ、壁から転がり出た彼は手にした突撃銃、《AK-47》を乱射する。このまま待っていても、残弾数の量と圧倒的火力

の違いで追い詰められるだけだ。

乱射した方向にいるのは《ブローニングM1917重機関銃》ヘヴィー・マシンガンを構えた男。

すぐさま彼の視界に《着弾予測円》バレットサークルが浮かび上がる。

薄グリーンの輪は半径二十センチまで縮小。

即座に、彼は《AK-47》の引き金を絞った。

そして、全自動射撃フル・オート、着弾。

男のHPバーが、銃弾に当たった分だけがぐん、と減る。

それを見た彼は距離を詰めるべく走り出した。

「H*い*」よお

——しかし、

「You failed」しくじったな

ニヤリという男の笑みに気付いた彼は、背筋を凍りつかせた。
男の重機関銃はすでに、狙いを彼に定めていたからだ。

彼の視界に数十本の線が浮かび上がる——

「Sh*い*t!!」くそっ

——轟音。

彼のアバターは爆撃を受けたかのように碎け散った。

ポリゴン片が宙をキラキラと舞い、闘技場の中に戦闘終了を告げる音が鳴り響く。

それは火薬を連想させる音。

——彼の、現実世界からの退場を祝福するかのような。

.....

耳元を劈くように鳴り響いたのはセットされていた目覚まし時計のアラームだった。

今時、古典的で漫画の中にしか登場しないような目覚まし時計だが、それも仕方がない。お金があれば時計スケジュールメール電話一括の機械を買いたいもんだが、金が無い。

一人暮らしっていうのに憧れていたわりに、したらしたで苦勞が耐えないこの頃だった。

身を起こそうと、椅子の肘掛に手を付いた。

「.....あれ？」

頭に予想外の重さを感じる。

それに違和感も。

なんだなんだと頭に手をやると、硬いモノに触れた。

触り心地の良い球体のヘルメット(?)のような、大きな機械。

「.....そういえば昨日、《アミューズファイア》買ったんだっけ.....」

思い出して、アミューズフィアを頭から取り外す。

.....。

「.....」

寝ぼけた表情で、頭を掻いて———

「————！！ ログアウトしてんじゃんっ!？」

叫んで、隣の部屋の住人に怒鳴られた。

ブレンディット改め齊藤健也さいとう けんやの一日が始まった。

.....

「おいーっす斎藤!! 今日も元気でやってっか？」

「.....うるさい」

昼まで寝てしまっていたらしく、健也は慌てて学校に来ていた。
通っている学校は成績そこその高校。

当然、先生の厳しい説教おはなしはあったものの日頃からの遅刻の常習犯、
というわけでもないので早々に開放してもらった。

といっても、午後の授業は体力的な問題でほとんどが耳に入らなかった。

今は帰りのH Rホームルーム前の休み時間。

「斎藤が遅刻なんてホント珍しいよな」

机に突っ伏せる斎藤にそう言ったのは中学からの悪友、南波彰。なんばあきら

特徴である茶髪は、生活指導を数回受けたにもかかわらず担当教諭を口先だけで言い包めたという伝説を持つ。勉強はからっきしだがバスケのスポーツ推薦でこの高校に入学。容姿と身長、その陽気な性格から異性にモテモテというイラつく野郎だ。

「遅刻っていうか……昨日、色々あったんだよ」

「どーせゲームばかりしてたんだろ？ 夜までやり込むこたあないだろうに」

うっせ、と軽く答えて溜息を吐く。

彰を僻む訳ではないが、自分はカッコいい、という言葉とは無縁だった。

気弱そうな目に高くない身長。寝癖のつきやすいボサボサの黒髪。

《GGO》のアバター、《ブレンディット》とは大きく違う。

友人曰く、そこまでダサくはないとの事だが。

「あ、そうそう。斎藤、放課後空いてつか？」

「……………なんかあるの？」

「いや、みんなとゲーセン行くからさ。一緒にどうだ？ たまには良いだろゲーセン」

ゲーセン、ゲームセンター。

斎藤はお世辞にも、友達付き合いが得意ではない。

自分が行っても空気を悪くするだけだと分かっているので、

「いや、遠慮する。悪いな誘ってくれたのに」

「そっか。なら良いんだ。また今度の機会に誘わしてもらおうよ」

ニカッと笑った彰は他の生徒に呼ばれてそっちに行った。

どうしてクラスの人気者が俺なんかを気にかけるんだろうね……と自嘲的に呟いたところで、チャイムが聞こえた。

（帰ったら、バグの原因でも探してみるか……）

そんなことを考えながら、教室にやって来た先生の話を聞き流すのであった。

斎藤 健也（後書き）

今回出て来たにゅーわーずは次回紹介していきたいと思います。
紹介していなかったところで分かり難い場所があればお教えください。

では、また次回をお楽しみください！

二度目のログイン（前書き）

今回は少し長めです。

全体的にボロボロで特にひどい駄文となっていますがご了承ください。

今回はオリキャラが一人、原作から一人登場します！

すこしでもお楽しみいただければ嬉しいです！
それではどうぞ！

二度目のログイン

ナブローニングM1917重機関銃^{ヘヴィー・マシンガン}

1901年に開発されたアメリカ生まれの重機関銃^{ヘヴィー・マシンガン}。一度は見捨てられた銃だったが1917年にアメリカ陸軍で正式採用が決まった。7.62ミリのスプリングフィールド弾を毎分600発で放つその威力は、一発食らえばHPの三割は持っていかれるほど。装備要求STRや重量がかなり高いので一対一で使うプレイヤーは少ない。

ナAK-47

使い勝手の良い突撃銃^{アサルト・ライフル}で、比較的手に入りやすい割には安定した攻撃力を発揮する。装備要求STRはそれほど高いわけではないのでAGIを優先に上げているプレイヤーの間でも評判が良い。

.....

学校から帰宅し、斉藤は鞆を布団に放り投げた。

ボロボロな格安アパートに住んでもう結構な時間が過ぎた。相変わらず、玄関から入って最初に見えるのは部屋の半分を占拠する背もたれ付きの椅子に、その上に転がるアミューズフィアだ。

「さて、どこが壊れてるんでしょうかねーと………」

意味もなく独り言を呟きながら、アミューズフィアを手に持ち、椅子に座る。

見たところ、傷らしい傷はなかった。

つい最近買ったばかりなのであったらあったで困るが。

その後、数十分。

細部に至るまで詳しく調べてみたが、結局傷とかは見つからなかった。

VRMMOは《SAO事件》以来、崩れ去った信頼を取り戻そうとメンテナンスを徹底的に行っている。まさかとは思うが、GGO本体のバグかもしれない。

「また、ログインするしかないのか？」

しばし、考える。

確かに昨日、ログアウト不可にはなったものの結局はこうして現実世界に戻ってこられた。暢気に構えるというわけではないが、買ったばかりのゲームを一度しかプレイしないなんて勿体無さ過ぎる。

「…………大丈夫、だよなあ？」

椅子に深く背中を預け、アミューズフィアを頭から被る。

側面に付いた電源を入れ、僅かな電子音が聞こえてきた。

「ログアウト不可になりませんように！」

祈り、目を閉じた。

「リンク・スタート！」

その一言で、斉藤の意識は遠い世界へと旅立った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

不思議な浮遊感覚を終えて、代わりに地面に足を付けたのを感じ取る。

二本の足で立ち、体が安定したところで彼――ブレンディットは初めて眼を開けた。

そこに広がるは巨大な鋼鉄の町。

「《S B C グロッケン》……相変わらずのデカさだな」

ブレンディットはしばらくその光景を眺めていたが、思い出したように右手を振ってメニューを呼び出した。

現れたメニューの右下にログアウトボタンがあるか探した。

「―――あれ？ 直ってる？」

右隅にあったログアウトの文字は使用可能。

どうやらログアウトはできるようだ、と安堵したブレンディットだった。

「そういえばアイテムはどうだろう？」

次いで開いたアイテム欄には先日と変わらず《カローン p 21》が二丁、フォトンソードに分類される《センコウ？》が表示されている。

金も、クレジット昨日のバーで結構使ったが、まだ余裕がある。

そこまで確認してから初めて、ブレンディットは足を動かした。

どこへ行くつもりでもなく、ただなんとなくだ。

「どうすっかなー……」

初心者ならば武器屋ガンショップに向かい装備を整えるところだが、なにせいきなりコンバートされていたキャラで戦闘技術も勝手に体が動くような感覚が今もまだ残る。

これならば別にセオリー通りにやる必要もない。

自分の実力を試してみたい、そう思ったブレンディットはとりあえず人の集まるところに向かおうと考えた。この《SBCグロッケン》に人の集まるところと言えば、まず総督府以外はあり得ない。

さっそく総督府を目指し歩き始めた——が、

.....

「……………広すぎるだろ」

茫然と呟く。

地図を開いては見たものの、立体で表示されても訳が分からない。解読不能な複雑さだ。

しばらく右往左往していたが、どうも総督府に着くには案内が必要そうだ。

ブレンディットは立ち止り、メニューを開く。

フレンドリストに載っているのは昨日知り合った《ハイル》と《源氏》。どちらも名前はグレーで表示されている。今日はログインし

ていないようだ。

「道案内は期待できないかあ……………」

どこまで歩いてでもビルばかり。

それぞれに色々な役割があるのだろうが、どれも同じにしか見えない。

大きな通りには人が数人通るくらいで活気がない。

大方、酒場に籠るか狩りに出かけているのだろう。

気長に歩くしかないか、と溜息を吐き、現実と見間違うほど精緻な街の造りを見ながら歩いていると、遠くの方から大声が聞こえた。

「なんだ？」

方向転換し、声のしたところを目指して角をひとつ曲がる。

友人に、お前の野次馬癖はトラブルに直結する、と注意を受けたことがあったが、別に関わるつもりはないし危なかったら遠くで見えるから大丈夫。

自分に言い聞かせ、友人の助言を脳内メモリーから削除。

「おい、アレ見ろよ……《アーセナル7000アキュラシー》じゃねえか……」

「マジかよ!?!? てことはアイツ、与^{ヨイチ}一か?」

視界に入ったのは人ばかりで、集まった人々が口々に囁いている。誰か有名なプレイヤーがいるらしい。

残念ながら人の壁に阻まれて良く見えない。

「与一って……ゼクシード奴がやってるスコードギルドロンの狙撃手スナイパーだよな、確か」

「かなりのすぐ腕って話だぜ？ てかテメエ一回殺ヤられてるだろうが」

ひゃっひゃつと笑う二人組の男にブレンディットは声をかけた。

「ちよつとすいません。何があったんですか？」

「あん？ ……ああ、与一だよ。アイツがゼクシードのスコードロン抜けたとよ」

「それでゼクシードの奴がキレてんのか？」

「知らねえよ」

「知っとけよ」

またひゃっひゃつと笑い始めた二人組。

事情が掴めないブレンディットだったが、どうやらスコードロン、他のゲームで言うギルドから抜けようとしている有名プレイヤーがいるらしい。

それで言い争っている、といったところだろうか？

「勝手に抜けるなど許さんぞ！」

と、人ごみの中心から大声が聞こえた。

そして耳を澄ませると、答えるように女性の声が聞こえた。

「拘束されるつもりはないと言ったし、ゼクシードからも抜けて良いと許可は貰った」

低いアルトの声に呆れたような響きが含まれている。

どうやらそのゼクシードとやらがキレているわけでは無いらしい。

「自分勝手な……少し名が売れたからって調子に乗るな！」

「別に調子になど乗っていない……それよりもう行きたいんだが？」

「待てっ！」

人ごみが分かれて、中からひとりのプレイヤーが姿を現した。

鋭い銀色の眼に黒の髪。肩にかかる程度の長さ。

肩に担いだ巨大ながらも洗礼されたフォルムの銃は、たぶん会話中に出て来たレアな狙撃銃、《アーセナル7000アキュラシー》だろう。
スナイパー・ライフル

早足でその場から立ち去ろうとしていた与一だったが、ふとブレンディットと目が合った。

「おっと」

与一は一瞬目を見開いて足をとめた。

驚きの表情がやがて笑みに変わっていく。

「都合の良い事もあったものだな………」

「待てと言ってるだろう!」

与一の言葉は、次いで人ごみから出て来たプレイヤーの声にかき消された。

言い争っていたスコードロンのプレイヤーだ。

印象はまさに屈強な兵士、といったところか。

腰に吊り下げられている拳銃がこれほど似合うプレイヤーは初めて見た。

「理由はなんだ? スコードロンを抜けてまで何がしたい?」

男は与一に詰め寄って怒鳴った。

「クエストだ。特殊クエスト」

「特殊クエストだと? それなら俺達と出来るだろう」

「違う。特殊クエストは条件付きのことが多い。そして私が狙うクエストは貴方達のスコードロンでは動きにくいモノだ」

「だがスコードロンを抜ける必要はないだろう!」

すると与一はそうなのだが、と呟き、ブレンディットを指差した。
野次馬たちの視線がブレンディットに集まる。

「昨日、気が変わった。こちらの方と組んだ方が楽しめそうでね」

「はあっ!?!」

ブレンディットは驚き、目を丸くした。

有名プレイヤーから指名されるなど予想外も良いところだ。

そもそも昨日始めたばかりで知り合いも二人しかないというのに。

「ちょ、ちょっと待ってください。俺、貴方と知り合いでしたっけ？」

「いや、顔を合わせるのは今日が初めてだ」

ますます訳が分からない。

どう答えればいいのか、ブレンディットが戸惑っているうちにスコードロンの男がこちらを睨んでいるのに気がついた。

脳内で、やはり厄介事に巻き込まれたな、と嘲笑う声が聞こえた気がした。

「お前……ッ！ 俺達を敵に回すということだな……」

「ち、ちがっ！」

「さ、そうと決まれば総督府に向かうぞ。ついて来い」

ブレンディットが反論する前に、与一はさっさとブレンディットの手を引いた。

初心者なのに強そうなスコードロンを敵に回してしまったブレンディットは、憂鬱になりながら手を引かれていた。

その場で与一に反抗しなかったのは、単純に彼女が高レベルプレイ

ヤーだからだろう。

「覚えておけよ………」

後ろから聞こえたスコードロンの男の声は、ブレンディットに届かなかった。

二度目のログイン（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回は特殊クエスト開始、までいけたら良いなと思っています。

ちなみに登場した銃ですが、たまに現実にはない実弾銃が有ったりしますが、本文の最初で毎回説明しますのでご了承ください。

銃については詳しくないんで、間違いが有りましたらご指摘ください。

それでは次回をお楽しみにーw

特殊クエスト (1) (前書き)

前回の続きです。

ちなみに前回と今回出て来た《7アキュラシー》ですが、たぶん実在はしません。ていうのもとある文庫本からとってるんですが……
…検索キーワードに《若干クロス》って書いておいたから大丈夫ですよね？

ふざけんじゃねえとお思いの方もいると思いますが、華麗にスルーしちゃってくださいw

特殊クエスト (1)

＋センコウ？

フォトンソードに分類される近接武器。柄は銀色で刃は赤色。《センコウ》は？？？までのタイプが有り、いずれもモンスタードロップでしか出ない。フォトンソードは全体的に高威力だが《センコウ？》は特に攻撃力が高く、対人戦で絶大な力を発揮する。

＋アーセナル7000アキュラシー

通称、7アキュラシー。精密射撃に適した手動式狙撃銃。ボルトアクション・スナイパー・ライフル7・62

ミリ・アーセナル・マグナム弾という専用の弾を使用する。サーバ

アンチマテリアル・スナイパー・ライフル

ーに十丁ほどしかないと言われる対物狙撃銃の中でも特にレアリティの高い《PGM・ウルティマラティオ・ヘカート？》に勝るとも劣らない《発掘武器》。現時点、日本サーバー内で7アキュラシーを超える対物狙撃銃は見つかっていない。

アンチマテリアル・スナイパー・ライフル

.....

驚いたことに、ほんの数分歩いただけで総督府に到着してしまった。

目の前にそびえる高い塔を見上げながら、ブレンディットは感嘆の息をこぼす。

「これが……総督府………」

「皆は《ブリッジ》って呼ぶ。たいていの操作はここで行うし、クエストの受け付けもここだ」

「へえ……………」

納得したように頷きかけたブレンディットだが、はっとしたように隣に立つ女性、与一に文句を言う。

「ってそうじゃなくて！ どうして俺なんかを特殊クエストのパートナーに選んだんですか！？ おかげで強そうなプレイヤーに目を付けられましたし！」

「説明してなかったか？」

「してませんよ！」

最初は高レベルベテランプレイヤーだからと恐縮していたブレンディットも、道中の会話で与一がずいぶんとマイペースな性格だと思いついた。

こちらがした質問にも欲しい回答が貰えなかった。

で、そんなマイペース与一は総督府に向かって扇状に広がる階段をのぼりはじめた。

ブレンディットも已む無く後を付いて行く。

「何故、君を選んだか……………だったね？」

足は動かしたまま、与一はようやく話し始めた。

「昨日、遠目に見させてもらってたんだよ。君の戦闘を」

「昨日って……………源氏さんのパーティ戦……………」

「そう。それだ。……あのとき、私は十三に頼まれて出口を塞いでたんだ。情けない話、借りがあって早くに返したかったんだよ」

「じゃあ、途中で一人が狙撃されたのって……」

「それ、やったの私だ」

あまりにも呆気無く言い放った与一に、ブレンディットは思わず黙る。

与一は何を思ったのか、突然笑って言った。

「いやいや、あの時は傑作だった。あれほどの技術を持ったプレイヤー、他にいないからな。初心者だろうと、実力での射撃すら行ってしまうようなプレイヤーをほおっておく手はないだろう？」

「……だから初めて目が合った時……」

「ああ。目を疑って、次に自分の幸運に感謝したよ。ちょうど探そうと思った矢先に出会えたんだからな。……もしかしてこれは運命じゃないか？」

「違うと思います」

真面目な顔して何をしているんだ？ とブレンディットは溜息を吐いた。

友人の忠告は無視しない方が良かった、と後悔しながら、気づけば目の前まで迫っていた総督府の扉を押しあける。

すでに中に入った与一の姿を確認し、そちらに向かう。

「特殊クエストの発注はこっちだ」

与一の声の方には銀行のATMのようなターミナルがあった。

日本語表記のタッチパネル画面に感謝してブレンディットは画面の文字に目を走らせる。

「特殊クエスト、特殊クエスト……」

文字を探していたが、突然視界の隅に枠があらわれた。

内容は、

《与一 からパーティの要請が来ました》
というもの。

返事は《YES》をタッチして返す。

「初心者、だとは信じられないが、実際そうなのだろう？ パーティを組んで受け付けはこちらでやっておく」

言うとう与一は手慣れた様子でタッチパネルを操作し始めた。

ブレンディットはそれを横目で見て、近くの椅子に腰かける。

気づけばいつの間にか特殊クエストと一緒に受けるという約束までしてしまったし、与一と出会ってから完全にペースを崩されている。

そんなことを思い溜息を吐いたブレンディットだったが、ふと見上げた視界の中に大モニタがあった。

周囲の壁にも大小さまざまなモニタがあり、それぞれがイベントや案内板などを映している。

そして目の前の大モニターは派手ながらも硬質さを感じさせる文体で《第一回バレット・オブ・バレッツ》の文字が浮かんでいる。

「バレット・オブ・バレッツ………」

ブレンディットもこの言葉に聞き覚えがないはずがなかった。

《GGOこのゲーム》で最強のガンナーを決める大会。パッケージにもでかかど記載されていた。

ぼーっと眺めていると、発注を終えた与一が帰って来た。

「発注は終わった。後は地下に潜るだけ………って何を見てるんだ？」

「与一さん、バレット・オブ・バレッツって誰でも参加できるんですよね？」

与一は頷き、苦笑した。

「当然だ。私もそれに参加するつもりだが、君もか？」

「……そりゃあ、出ようとは思いますが………」

「ふふっ。口では初心者という割に、ずいぶん強気じゃないか」

そんなことを言われたって、この大会で優勝することが《GGO》をプレイする最終目標だろう。ゲーマー、と名乗るのもおこがましいかも知れないが、その端くれとして是非挑んでみたい大会である。

「あと一週間後だったか？　実は今回の特殊クエストも、その準備のため……………」

と、与一はそこで口を噤んで、ブレンディットの手を引っ張り椅子から立たせた。

「…………そんなことはどうでも良かったな。じゃあ行こうかブレンディット君？」

「そういえば…………地下に潜るとか言ってましたけど、ダンジョンはどこにあるんですか？」

「ここだよ」

ブレンディットの問いに、与一は自分の立っている床を指差した。

つまり、

「場所は総督府…………いや、《SBCグロッケン》の真下に広がる地下都市、その地下11階だ」
ダンジョン

その言葉を聞いて、頭で噛み砕き、理解したとき。

ブレンディットは与一の正気を疑った。

「11階…………って！　超高難度のダンジョンじゃないですか!？」

たいていのゲームはネットなどで情報を集めてからプレイするのが通例で、ブレンディットもネットからある程度の情報は知り得ていた。

《SBCグロッケン》の地下には古代都市の遺跡型ダンジョンが広がっており、地下に行くほど敵は強くなる。当然レアなアイテムのドロップ率も比例して大きくなるが、それらの情報は10階までのモノしかなかった。

理由は簡単で、10階までは難易度はそれほど無く、11階からいきなり高難易度のダンジョンへと化けるのだ。

ソロは無謀。パーティでもそれなりの装備と人数を揃えなければ十分と経たず街のセーブポイントに《死に戻り》するという超有名ダンジョンだ。

ブレンディットが与一の正気を疑うのも無理はない。

「いや、そこまで心配しなくても大丈夫だ。標的ターゲットがいる場所は分かっているからな」

「分かっているって……そもそも攻略サイトには載っていないでしょう？」

「攻略サイトには、な。——これを見てくれ」

与一が取り出したのは地図のような——いや、何かのメモと言った方が正しいだろう。
なにかが記された紙きれだった。

「これは………カマキリ 蠨螂？」

紙に書かれていたのは蠨螂の造形をした機械の絵だった。

「たぶんな。で、私の受けたクエストはこいつ三体の討伐だ」

「三体の討伐……………」

難度はそれほど高くなさそうに聞こえる。

サイズからして、ボスの類ではなさそうだし、だとしたらブレンデイトを呼んだ意味が分からない。

与一は歩きながら話を続けた。

「この紙が無いと受けられないクエストなんだ。前のクエストで入手してね。君を呼んだ理由は……………まあ戦ってみれば分かるだろう。ともかく、報酬アイテムが欲しいんだよ」

「はあ……………」

そして与一は立ち止った。

与一の前にあるのは地下に続く階段。

そこは闇に染まっており、先がまったく見えないようになっている。

「さ、行こうか」

《アーセナル7000アキュラシー》を担いだ与一は、気負った様子もなく入っていく。

あとを追ったブレンデイトは、小声でつぶやく。

「……………どうなる事やら」

二人の姿は、階段の闇に沈んだ。

特殊クエスト (1) (後書き)

次回は地下に潜ったトコからです。

原作を崩壊させるつもりはないですが、ところどころ違ったりするのをご了承ください。

それでは、次回もお楽しみに！

特殊クエスト (2) (前書き)

前回の続きです。

特に言うことはありません。ハイ。

特殊クエスト (2)

＋実力での射撃

基本的な解釈は予測線無し of 射撃。《GGO》での着弾予測円と弾道予測円の表示設定は変更可能で、着弾予測円を非表示にすることで弾道予測線も表示されなくなる。着弾予測円を表示するとランダムでも、円の中に敵を捉えれば弾が当たるのに対し、非表示だと銃口と敵が1ミリでもずれていると命中はしない。故に着弾予測円を利用した方の射撃の方が良く当たる。ただし、狙撃手スナイパーにのみ許された予測線無しの一撃を無制限に撃てるのはかなりの強み。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

眼前の敵モンスターが爆散したのを確認し、すぐさま身を捻った。

————直後、空を裂く銃弾の嵐。

その鉛の暴風は、身を捻った男————ブレンディットのもと居た位置をズタズタに引き裂いた。

「ハアッ!!」

数メートル離れた場所に着地、腰から抜き放った二丁の拳銃が火を吹く。

打ち出された二発の弾丸は、特殊な形をしている銃を持った人型の生物に突き刺さる。

奇妙な声を上げて、人型の生物の頭上のHPヒット・ポイントバーが減少する。

残り半分。

生き残った人型の生物は眼だけをギョロりと動かし――――

「ギャッ！」

――頭部を吹き飛ばされた。

それに数瞬遅れて、咆哮の如き轟音が響き渡る。

そして人型の生物はポリゴン片となり、爆散。

「……………すっごい威力ですね、ソレ」

ブレンディットは驚くのに慣れたのか、呆れを声に滲ませて言った。

自分の背後にいる、音速を超えた弾丸を打ち出す怪物狙撃銃の持ち主モンスターズナイバー・ライフルに。

「当たり前だろう？ これは日本サーバーで実物が確認された内の、その頂点に位置する破壊力を持つものだから」

その怪物――――《アーセナル7000アキュラシー》を担いだ与一は、自慢する訳ではなく、事実のみを告げた。実際、それほど威力があるのだ。この銃には。

《SBCグロッケン》の地下に広がる地下都市の高レベルダンジョン、その10階に生息するモンスターのHP半分を残らず吹き飛ばすなど、並みの武器に出来る事ではない。

ブレンディットもその攻撃力を見て来たので、納得できる。

これほど安心できる後方支援は他にないだろう、と。

「だがまあ、7アキュラシー^{こじっ}が未踏破の11階でどれほど通用するか分からないけどな」

「その銃でダメなら、俺の銃を使ってもダメージ与えられないんじゃない……」

「なにを言っている？ だからこそそのフォトンソードだろう？」

軽く言った与一は天井から吊り下がる明りを頼りに先に進んだ。
ブレンディットもそのあとについて行く。

「そのためのって……あの敵の武器見ました？ あんなに連射されたら避けようがないですよ。そもそも近づくのは無理だと思います」

「いや、君の身のこなしなら案外イケるんじゃないか？ さっきも至近距離からの射撃に反応して見せただろう」

「あれはまぐれですよ。そう何度も上手くいきません」

「どうだろうな？」

そんな話をしながら、歩く事しばらく。

この迷宮の10階の中、下へと続く階段を探し歩いてもう数十分は経っている。

そろそろ階段が見えてもいいころだ、と思っていると。

「…………あそこか」

与一はふとそう呟いた。

ブレンディットの視界には何も見えないが、与一は狙撃手^{スナイパー}を補助するための《暗視ゴーグル》を装備していた。このような暗いダンジョンでは敵を視認しづらい。一般的には命中率を向上させるという効果のみが認知されているが、実は遠くを見えるようになるという効果も存在するのだ。

そして与一は、眉を顰めた。

「どうしたんですか？」

ブレンディットが聞くと、与一は指を一本口元に立てた。音を立てるな、という合図だ。

与一は小声でブレンディットに指示を出す。

「階段の前、敵、戦闘準備」

「了解」

単語のみで意志疎通を行い、与一は通路に腹を付けて寝そべった。
^{ブローニング・ボジション}伏せ撃ちでの射撃を行う体勢になり、^{スナイパー・ライフル}長大な狙撃銃を構える。

ポーチから先端の鋭く尖った弾、^{アーマビレアシング}外殻の堅いモンスターをも容易に撃ち抜く徹甲弾を取り出し、自身のライフルに装填する。

数は5発。銃のボルトを音高く引き、スコープを覗き込む。
途端、空気が凍りついたかのような緊張感が生まれる。

「……………」

静寂。

あたりを静寂が支配する。

「—————」

永遠のような数秒間、それは突然訪れた。

「—————ッ!!」

ライフルが衝撃で跳ね上がる。

轟音が響き渡り、一筋の雷光が空間を貫いた。

瞬間的な速度で通路の奥に消えた光は、しかしすぐに着弾を現す音が聞こえた。

次に聞こえたのは、金属を擦り合うような耳障りな音。
そして鋭い鳴き声。

「キシヤアツーツ!!」

ガガガガッ!! という、床を叩く音は次第に大きくなってきた。

ブレンディットは《カローン p21》を静かに構える。

銃口を通路の向こう側に向け、ソレが現れるのを待つ。

（階段に近いってことは、レベル的に11階の奴だろうな……）

内心で予測を立てる。

そして、トリガーガードから引き金に指をかけた時、

「キシヤアツーツ！！ キイツ！！」

姿を現したのは^{カマキリ}蠍螂。

濃いグレーの金属光沢がひかり、鎌の下銃口がこちらに向けられていた。

表示されたHPバーが10分の1ほど減少しているのは、与一のライフルによるものだろう。

眺めていたブレンディットの脳内で、与一に見せられた紙の絵が一致した。

「ッー！！」

瞬間、撃っていた。ブレンディットはその蠍螂に二丁の銃の全弾、計42発の9ミリパラベラムを撃ち込んでいた。全自動射撃で放たれた鉛弾は赤く光る蠍螂の両目に当たったが、

「……………嘘だろ」

蠍螂のHPバーは爪の先ほどしか減少しなかった。

蠍螂の外殻が恐ろしいほどの防御力を誇っている証だ。

啞然としながらも、しかし手は《カローン p21》に新しい弾倉を

叩き込む。

「キシヤッ！ キシヤアー！！」

蟪蛄は猛り狂ったように、ブレンディット目掛けて射撃を行った。
連射速度は下手な短機関銃サブ・マシンガンよりも速い。

「これはヤバい！」

横飛びになって避けたブレンディットだが、一発の銃弾が右足に当たった。

そして————HPバーの5分の1が削り取られた。

「嘘おっ!?!」

フル・オート
全自動射撃の一発が、これほどの威力だとはさすがに聞いていない。
一発でも当たれば、衝撃に足を取られ続く攻撃も当たってしまう。
油断のならない敵だということを、改めて認識させられた。

「キシヤッー!!」

蟪蛄が第二射を行おうとした。

狙いは勿論ブレンディット。だがしかし。

こちらにはブレンディットの他にもう一人の味方が存在する。

「下がれッ！ ブレンディット!!」

その声に、ブレンディットは思い切り跳躍、後方に下がった———

——瞬間、その真下をオレンジ色の雷光が駆け抜ける。

それは轟音が鳴り響く前に蠋螂の眼球にぶち当たった。
衝撃を受けて吹っ飛ぶ蠋螂。

「近距離なら、ダメージは先程の比じゃないぞ」

与一の言葉通り、蠋螂のHPバーは残り半分を割り、あと3分の1
といったところか。

それを見て、ブレンディットは倒れている蠋螂に向かって進む。

右手の筒から、魔法のような赤い光刃を煌めかせながら。

「弱点は眼だ！ 刺し込め！！」

「了解ッ！！」

蠋螂との距離を詰めたブレンディットは、走る勢いそのままに光刃
を突き立てた。

「シャアッ————」

抵抗しようとした蠋螂だが、ブレンディットが光刃を捻り抜くと赤
色に点滅していたHPバーは簡単に消滅した。

一度動きを止め、蠋螂は爆散。跡形もなくなる。

それを見届けて、ブレンディットはようやく光刃を仕舞ったのだっ
た。

特殊クエスト (2) (後書き)

たぶんあともう二、三話はかかると思います。

あと中々に時間が……

次回から更新速度が遅くなるかもしれませんが、ご了承ください。

でも頑張って書いてきますんで、応援よろしくお願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3436o/>

ガンゲイル・オンライン ～鉛の亡霊～

2011年1月16日05時05分発行